

「小沢一郎が考える真の民主主義」について

11期 秘書A

第1節 はじめに

まず、「民主主義とは何か」について、考えてみたい。「民主主義(民主政)」とは、統治する者と統治される者との間に自同性の関係をもたせようとする原理、つまり国民の政治的自治または自立を認める原理である。

第2節 「真の民主主義」とは

次に、小沢塾長が考える「真の民主主義は何か」について、『日本改造計画』を基にして検討していきたい。

日本において、個人は集団への自己埋没の代償として、生活と安全を集団から保証されてきたといえる。それが、いわば、日本型民主主義の社会である。そこには、自己責任の考え方は成立する余地がなく、日本で社会と個人のこのような関係が成り立ってきたのは、一部の例外を除いて外部との交渉の歴史をもたない同質社会であったからだ。

グローバリゼーションによる国際社会の変革に伴い、日本社会は日本型民主主義の前提である同質社会ではなくなったため、社会構造の見直しを断行しなければならない。

では、どのように変革するのか。『日本改造計画』では次のように述べられている。「第一に、政治のリーダーシップを確立することである。それにより、政策決定の過程を明確にし、誰が責任を持ち、何を考え、どういう方向を目指しているのかを国内外に示す必要がある。

第二に、地方分権である。国家全体として必要不可欠な権限以外はすべて地方に移し、地方の自主性を尊重する。

第三に、規制の撤廃である。経済活動や社会活動は最低限度のルールを設けるにとどめ、基本的に自由にする。

これら3つの改革の根底にある、究極の目標は、個人の自立である。すなわち真の民主主義の確立である。」(注1)

すなわち、「個人の自立なくして、真の民主主義の確立はなし。」というのが小沢先生の認識である。同様に、国家として自立することもありえない。自ら規制を求め、自由を放棄する。そして、地方は国に依存し、国は、責任を持って政治をリードする者がいない。

「真に自由で民主的な社会を形成し、国家として自立するには、個人の自立をはからなければならない。その意味では、国民の“意識改革”こそが、現在の日本にとって最も重要

な課題といえる。」(注2)

この一節がある『日本改造計画』は18年前に書かれた本であるが、この課題の解決の必要性は、今日でも変わっていないばかりか、政治不信や政党不信という点においては18年前よりも深刻な問題となっているのでないだろうか。

第3節 「真の民主主義」の確立のために必要なこと

最後に、前節で述べた小沢塾長の考えを深く掘り下げると同時に、私見を交えながら、真の民主主義の確立のために改革すべきことを具体的に述べていきたい。

第1に、「個人の自立」と「国民の自立」である。これについて『日本改造計画』では、次のように書かれている。

「民主主義とは、その歴史を見れば分かるように、国民が立ち上がって国王や君主から権力を奪取することから始まった。国民の自治が民主主義なのである。したがって、当然、国民が自分の両足で立つことが民主主義の前提となる。逆にいえば、その前提がなければ、政治や行政がどんなに民主主義の実現を目指しても、それは疑似民主主義とならざるをえない。」(注3)

この一節こそ、今日の日本における民主主義の実態を浮き彫りにしているのではないだろうか。私は、「個人の自立」と「国民の自立」が真の民主主義の確立のために必要なものの一丁目1番地だと確信している。私は、どうして現在の日本に民主主義が根づいているとは思えない。なぜなら、国民のほとんどは「個人としての考え」をもっておらず、マスコミやその時の空気によって左右されてしまうからだ。日本の進むべき道を決めるのは、主権者たる国民一人ひとりなのである。自分で考え、自分で決断し、自分の責任において権利行使することが、真の民主主義を確立することになるのではないだろうか。

第2に、「国民の生活が第一。」である。小泉政権以降の都市中心の市場原理主義に対抗するレジスタンスのスローガンとして小沢塾長が考案したのが「国民の生活が第一。」であった。

『小沢主義』にも引用されているが、『日本書紀』に仁徳天皇のエピソードが紹介されている。いわゆる「民のかまど」である。

ある日、仁徳天皇が皇居の高殿に登って四方を眺めると、人々の家からは少しも煙が立ち上がっていないことに気付いた。天皇は「これはきっと、かまどで煮炊きできないほど国民が生活に困っているからに違いない」と考えて、それから3年間租税を免除するとともに自らもぜいたくを絶ち、宮殿は荒れるにまかせたという。

また、「天皇の位は、そもそも人々のために作られたもの」という仁徳天皇の言葉にこそ、小沢先生は政治の本質が隠されていると考えている。私は、この「国民の生活が第一。」というスローガンの根幹に「民のかまど」の精神が受け継がれているのではないか。

また、『小沢主義』には次のような記述がある。

「みんなが幸せな生活を、豊かで平穏な生活を送れるようにするために、何をするべきか。それを考えるのが政治の役割、政治家の役割であって、それ以上でもそれ以下でもない。」

(注 4)

この一節は、政治は生活であることを意味する。これを読んだときに、私は「国民の自立」には、政治がその責任において、国民の生活の基盤を整備し、守らなければならないと感じた。なぜなら、明日の生活が儘ならない国民が政治について考える余裕がないと考えたからだ。理想としては、全国民が無条件に政治に関心を持つこと、自分の考えを持つことが望まれる。しかし、この考えは非現実的であり、机上の空論といわざるをえない。

政治は、結果責任を伴うものであり、国民と約束をし、国民が期待したことを悪戦苦闘しながらも一所懸命頑張っている姿勢を国民に示すことが、重要なのだ。

第 3 に、「選挙を通じての民主主義の確立」である。民主政では、政治家は選挙によって選ばれる。政治家と有権者の関係については、次の記述がある。

「有権者との関係がすべての根底にある。1人ひとりが何を考えていて、どんな暮らしをしているかを聞いて歩く。そこにどんな道路があって、どんな橋があって、駅があって、それがどこつながっていて、便利か不便か課題が浮かび上がってくる。あまたいる政治家の中でもこれができる人はほとんどいない。だから、国民の願いを履き違えて選挙で落とされる」(注 5)

これは、「どぶ板選挙」こそが、本当の選挙であり、民主主義の原点であることを意味する。この関係がなくなったときに民主主義がなくなる。また、今日の日本でそうした「選挙の重さ」についても理解されていないことも指摘しておきたい。

第 4 に、「国民のマスコミ報道からの自由」である。マスコミは立法、行政、司法と並び、「第 4 の権力」と呼ばれている。戦前、マスコミは大熱狂を作り出し、一度は国を滅ぼした。私は、日本において最も強力な権力を有しているには、マスコミではないかと感じている。自分たちで「空気」を作り、民主主義を標榜して国民に判断させる。そして、政治にリーダーシップを求め、実際にリーダーシップを発揮しようとする政治家が出現すると叩き、民主主義を否定する。政治不信とは、民主主義の否定である。本当の壊し屋は、自分の既得権益を守り、民主主義そのものを否定する「マスコミ」自身ではないだろうか。今日のマスコミ報道は悲劇としか言いようがない。「個人の自立」と「国民の自立」のためには、国民自らがそのことを把握し、「空気」に惑わされることなく、物事の本質を見極めなければならない。

第 5 に、「教育制度の見直し」である。より主体性を持たせる教育制度の導入や高等教育の義務教育化等の教育改革を断行し、民主主義の土壌を整備する必要性が高まっている。

第 6 に、「国民主導」、すなわち「政治主導」による政治運営である。そもそも、民主主義国家である日本の政治を政治家でなく、官僚が取り仕切ってきたこと自体が異常な事態であり、民主主義に反している。故に、政治の重要事項を政治家ではなく官僚が決めてし

まうのでは、日本はとうてい民主主義とは言えない。「官僚主導」から「政治主導」に改めることによって初めて「国民の国民による国民のための政治」が確立することになる。

第 7 に、政治家が「明確な責任」と「覚悟」をもつということである。『日本改造計画』では、日本の近代 120 年の歴史の中で、注目すべきリーダーとして、大久保利通、伊藤博文、原敬、吉田茂の 4 人が挙げられている。

この 4 人が、明確な責任をもち、強力なリーダーシップを発揮することができたのは、彼らが強烈な国家意識、つまり使命感と、それを実現するための権力意思をもっており、周囲の批判を受けながらも自らの使命を果たすために、権力機構を完全に掌握し、実行のための体制を固めたのである。

以上の点が、私の「小沢一郎が考える真の民主主義とは何か」という問いに対する答えと私見である。

最後に、「真の民主主義」の確立のために最も重要なことは、「国民の 1 人ひとりが自分の価値観を持ち、自分の判断で行動できる自立した個人として、物事の本質をとらえるということ」と、「自分で考え、自分で決断し、自分の責任において行動する」ということではないか。ケネディの「国家があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたがあなたの国家のために何ができるかを問おうではないか。」という精神が日本国民に最も欠けている部分であり、日本国民が再検討しなければならない責任である。この新しい責任を果たさない限り、日本に民主主義は根ざさず、いつまで経っても「おまかせ民主主義」に過ぎないと、私は考える。

(注 1) 小沢 一郎 『日本改造計画』 4 頁、5 頁

(注 2) 小沢 一郎 『日本改造計画』 5 頁

(注 3) 小沢 一郎 『日本改造計画』 251 頁

(注 4) 小沢 一郎 『小沢主義 志を持って、日本人』 52 頁

(注 5) 石川 知裕 『悪党 小沢一郎に仕えて』 119 頁

参考文献

[1]小沢 一郎 『日本改造計画』 講談社 1993 年

[2]小沢 一郎 『小沢主義 志を持って、日本人』 集英社文庫 2009 年

[3]石川 知裕 『悪党 小沢一郎に仕えて』 朝日新聞出版 2011 年

[4]芦部 信喜 『憲法 第三版』 岩波書店 2002 年